

## はじめに

学校長 尾崎啓子

本校は、今年度から「一人一人が力を発揮し、活躍する授業づくり～実態把握からの目標設定と、評価のフィードバックを通して～」をテーマとした教育実践研究をスタートさせました。昨年度までの6年間で、キャリア教育をテーマとして研究を行ってきた成果と課題をもとにテーマ設定した、1年目となります。

平成22年度からの6年間を概観すると、まず始めの3年間では、「知的障害のある児童生徒へのキャリア教育の在り方を探る—児童生徒の『自己実現』をめざす取り組み—」をテーマとした研究に取り組み、児童生徒の卒業後の生活を見通しての将来像の設定—具体化—現実化を、小学部・中学部・高等部の各段階が担うことの重要性を確認しました。続く3年間で、「自分の力を発揮し、生き生きとした姿をめざすキャリア教育の実践—子どもの将来を見据えた指導を求めて—」を主題として、キャリア教育の在り方の検討から研究成果の実践へと研究を進めてまいりました。「将来像」を軸とした指導・支援の取組と効果の分析・考察を日々の授業実践に活かした事例の数々は、平成27年度の研究集録で報告しています。

本集録第1章の研究概要でもふれていますが、この6年間の取組をふり返って、子どもが主体性を発揮して生き生きとした姿を示すための授業改善の視点と方法は整理されてきたものの、活動内容や課題が子どもの実態に合わないことがあるなど、実態把握の適切さと目標設定の妥当性を見直してみる必要があるのではないかという観点が出てきました。そこで、新しい研究では、子どもの「よさ」や「強み」だけでなく、「苦手なこと」や「弱み」にも改めて目を向けて実態を把握し、次の指導につながる具体的な目標設定と評価を行うための、仕組みづくりにとりかかろうということになりました。小・中・高等部の各学部で、個別の指導計画に、誰が見ても一目で子どもの実態がわかり指導の手立てに活かせるような共通の視点を設定し、配慮事項を含めた具体的な記述で、子どもたちのもつ「活かせる力」と「個性」がより明確になることを意図しています。個別の指導計画が有効に活用されるような工夫と改善に取り組んでいます。

今回の研究テーマはシンプルで、特別支援教育の原点に立ち返るような印象があるかと思いますが、若い教員が増えて知識の拡充と知恵の蓄積・共有が大切な課題となっている本校において、共に学び、専門性を高めていくために今一度確認しておきたく設定しました。また本年2月10日に開催した第46回研究協議会において指導者の先生方並びにご参加くださったたくさんの方からいただいたご意見を「視点」とし、本校ならではの特色が出るよう、2年次から考えと実践を深めてまいりたいと考えております。

結びにあたり、本研究の遂行にあたって多くの先生方にご指導ご助言をたまわりましたことに深く感謝申し上げます。また、いつも本校の教育活動を温かく支えて一緒に進めてくださっている保護者の皆さま、地域の方々、そして何より児童生徒の皆さんに、心よりの「ありがとう」の気持ちを伝えたいと思います。

# 第 1 章

## 研究の概要

# 研究概要

## 研究テーマ

一人一人が力を発揮し、活躍する授業づくり

～実態把握からの目標設定と、評価のフィードバックを通して～（1年次／3年研究）

## 研究目的

児童生徒一人一人が目標達成に向けて力を発揮する姿を引き出すための授業づくりの仕組みを示す。

### 1 テーマ設定の理由

#### 1-1 これまでの取り組みと本校の課題について

本校では昨年度までの6年間、キャリア教育をテーマに研究を行ってきた。前半の3年間では、一貫性のある教育を行うための全校共通の視点と各学部の視点を示し、後半の3年間ではその視点を活かした授業改善に取り組んできた。「現在の『生き生き』が、将来の『生き生き』につながる」という合言葉に、1時間の授業における改善のための視点、方法などが整理されてきた。しかし、場合によっては活動が子どもにそぐわないものになってしまっていたり、用意した支援が子どもに合わなかったりすることもあった。また、活動としては成立しているが、その目標が本当に子どもの課題を捉えたものになっているかという点で疑問を生じる授業が見られたこともあった。そのため、いわゆる「授業づくり」において、例えば実態把握の仕方一つとってもそれがどのような根拠に基づいてなされているかという点では、一貫性のあるキャリア教育の視点からだけでは客観性・妥当性は不十分と感じられた。

つまり、これまでのような教員の主観だけでない新たな視点を取り入れ、より適切な実態把握を行えるようになること、課題をしっかりと捉えた目標設定（目標・手だて）をすることができるようになること、また、評価をもとに改善をし続けていく仕組みが作られることが、本校の授業づくりをより充実させることができるのではないかと考えた。

#### 1-2 個別の指導計画について

目標設定や授業計画を立てる根拠となる実態把握は、本校では個別の指導計画に記載されている。個別の指導計画は本来、学期や单元ごとの授業計画と併せて、1時間1時間の授業実践の指導内容や目標、支援方法などの根拠となるものになっているはずである。

個別の指導計画について学習指導要領では、「各教科等の指導に当たっては、個々の児童又は生徒の実態を的確に把握し、個別の指導計画を作成すること。また、個別の指導計画に基づいて行われた学習の状況や結果を適切に評価し、指導の改善に努めること。」とされている（文部科学省, 2009）。そして特別支援学校においては多様な実態の児童生徒に対して、個々に応じた適切な指導を行うために、自立活動、及び各教科等にわたっても個別の指導計画を作成することとなっている。

本校では平成 15 年度から個別の指導計画の作成を始めているが、学部の教育課程編成の考え方を重視し、平成 25 年度まで学部ごとに異なる書式を使用していた。しかしながら、平成 25 年度に学校教育目標の具現化と 12 年間の一貫教育の確立に向けて、しかも読み手である保護者にとってわかりやすいものにするための検討を行い、平成 26 年度から下図のような 3 学部共通の書式を使用している。

1 枚目（年間①）は児童生徒の現在の状況（実態）についてと長期目標（個別の教育支援計画より転記）、2 枚目（年間②）には各学部のめざす子ども像と、年間指導目標及び手だて、3 枚目以降に前後期の各授業場面における目標が書かれている（図 1）。そして実態については、自立活動の 6 区分で記載するようになっており、これは埼玉県教育委員会が示した個別の指導計画（教育支援プラン B）と同じ形式となっている。2 枚目には、一貫した教育課程編成を意識し、各学部のつながりが見えるように全校、そして各学部のめざす子ども像が書かれている。3 枚目以降の前後期分の指導計画については、1 学期を前期、2・3 学期を後期として作成している。

このようにして見直してきた個別の指導計画ではあるが、これまでのキャリア教育をテーマとした研究で得られた学部での成果を取り入れ、個別の指導計画作成の際にも学部独自の作成の仕方や検討の仕方を行うようになってきた。また、人事異動による教員の入れ替わりから、共通理解がなされていないなかったり、記載されている実態が指導に活かしにくい、目標がどう理由から設定されたものかわからないため指導の方向性が定まらない、評価が次の指導につながりにくい等、指導計画そのものが形式的なものになってしまってきたりしているのでは、という意見も出てきている。

取扱い注意

個別の指導計画（年間①）

平成〇年度  
埼玉大学教育学部附属養正特別支援学校  
記入者 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

〇学部〇年（組） 〇〇 〇〇

1 現在の状況

健康の保持 (日常生活面、健康面など)	
心理的な安定 (情緒面、状況の理解など)	
人間関係の形成 (人とのかわり、集団への参加など)	
環境の把握 (感覚の活用、認知面、学習面など)	
身体の動き (運動・動作、作業面など)	
コミュニケーション (意思の伝達、言語の形成など)	
特記事項 (性格、行動特徴、興味関心など)	

2 長期目標

目 標	評 価 ・ 分 析
・	
・	

**個別の指導計画（年間①）**

取扱い注意

個別の指導計画（年間②）

平成〇年度  
埼玉大学教育学部附属養正特別支援学校  
記入者 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

〇学部〇年（組） 〇〇 〇〇

1 めざす子ども（生徒）像

めざす子ども像（全校共通）	小学部	中学部	高学部
・明るく元気、健康な子	・げんきな子	・やるべきことをやる生徒	・歯直した生徒
・じっくり考え、進んで行動する子	・がんばる子	・やる気のある生徒	・自ら学ぶ生徒
・社会のきまりを守り、行動する子	・なかよくする子	・なかまとともに学ぶ生徒	・社会性のある生徒
・自然の恵み、文化を大切にできる子			

2 年間指導目標

目 標	手だて	評 価 ・ 分 析
①		
②		
③		

**個別の指導計画（年間②）**

取扱い注意

個別の指導計画（平成〇年度：前期）

埼玉大学教育学部附属養正特別支援学校  
記入者 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

〇学部〇年（組） 〇〇 〇〇

1 年間指導目標（個別の指導計画（年間②）より転記）

目 標
①
②
③

2 指導目標の達成に向けて必要な手だて（個別の指導計画（年間②）より転記）

手だて
・
・
・

3 指導目標の達成目標

指導目標	評 価 ・ 分 析
日常生活 ..... ①	
生活 ..... ②	

**個別の指導計画（前後期）**

図 1 本校の個別の指導計画

このように個別の指導計画が必ずしも実際の授業実践に活かしきれていない現状であることは、本校の課題ともいえる。

一方、新学習指導要領の改訂に向けて、個別の教育支援計画・個別の指導計画については、作成・活用の留意点（一例として、PDC Aサイクルによる評価・改善）をそれぞれの計画の関係性をふまえながら示すことが必要であること、特に学習の評価については各教科の目標に準拠した観点別による学習評価を導入し、学習評価を基に授業評価や指導評価を行い、教育課程編成の改善・充実に活かすことのできるPDC Aサイクルを確立することが必要であると述べている。

また、自立活動については既に記載のある指導計画の作成の手順等に加えて、実態把握、指導目標（ねらい）の設定、指導項目の選定、具体的な指導内容の設定といった各プロセスをつなぐポイントを分かりやすくすることが求められている。

実態把握、目標や指導内容等の設定、評価などの各プロセス、またそのプロセスをつなぐ部分に必要な視点や考え方を整理し、指導実践の充実につながるような仕組みを確立することが必要であると考える。

前項で述べた通り、前研究の取組から1時間1時間における授業づくりの必要な視点や考え方は整理されてきた。これは個別の指導計画におけるPDC Aサイクル(図2)の中の「指導計画の実行(Do)」の部分の改善にあたる。そして個別の指導計画において本校はこれまでも、PDC Aサイクルの中でより良い授業実践を目指し進めてきたが、きちんと活かしきれていない状況を踏まえると、昨年度までの授業改善の取り組みに加え、授業実践に至るまでの実態把握から目標、手だての設定までの部分、そして授業実践後の評価の部分を見直し、考え方や視点を整理していくことで、より客観的に根拠が示しやすいものにしていく必要があると考える。

### 1-3 研究テーマについて

以上のように本校の学校研究から明らかになってきた課題と個別の指導計画に関わる現状を踏まえつつも、最終的には授業づくりの仕組みの見直しの中で、子どもたちのより良い姿を引き出していく必要がある。

今年度からの研究においても単に個別の指導計画の見直しだけではなく、本校の教育方針である、「一人一人のもてる力を最大限に発現させることによって、社会の主体としてたくましく生活できる子どもを育てる」という原点に立ち返って、「一人一人が力を発揮し、活躍する授業づくり」とし

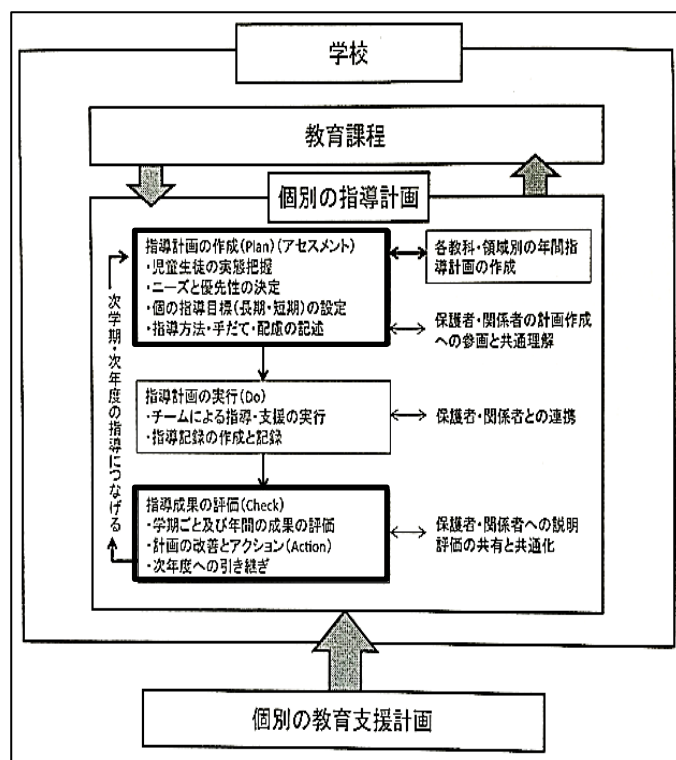


図2 個別の指導計画におけるPDC Aサイクル  
(出典：全国特別支援学校知的障害教育校長会 編著  
「知的障害教育における専門性の向上と実際」より)

た。

また、授業づくりのPDCAサイクルの中で特に大事にしたい「実態把握から目標設定」「目標設定から評価」、そして「評価から実態把握・目標設定（手だて含む）へのフィードバック」の3点に着目し、研究テーマを「一人一人が力を発揮し、活躍する授業づくり～実態把握からの目標設定と、評価のフィードバックを通して～」として、一人一人の子どもたちが授業実践で生き生きと活躍する姿を引き出したいと考える。

## 2 研究目的について

### 研究目的

児童生徒一人一人が目標達成に向けて力を発揮する姿を引き出すための授業づくりの仕組みを示す。

研究テーマにある、子どもたちの「力を発揮し、活躍する」姿を、より具体的に「授業目標達成に向けて力を発揮する姿」とし、児童生徒が授業の中で目標に向けて頑張る姿を引き出していくこととした。

そして、そのためには、子どもたちの適切な実態把握ができること、目標設定ができること、また、個別の指導計画における目標と授業実践における目標のつながりを明確にしていく必要がある。個別の指導計画のPDCAサイクルを通しつつも適切な実態把握、妥当な目標設定等を導き出すための検討の仕方や視点等を整理し、形にしていくことをめざし、研究目的を「授業づくりの仕組みを示す」とした。

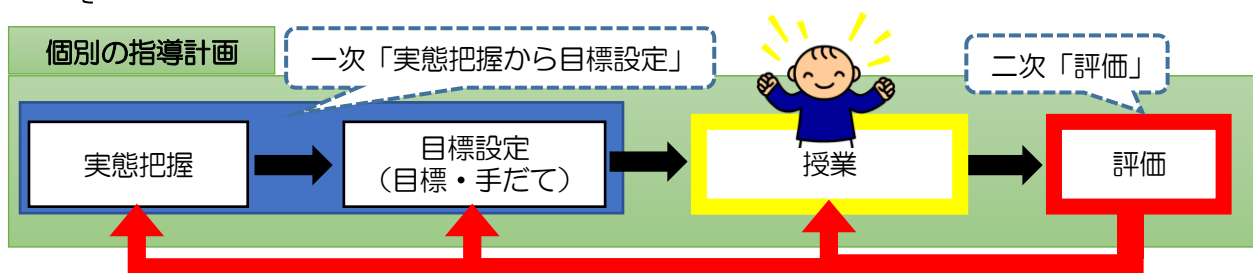
なお、本研究において「授業づくり」とは、児童生徒の実態把握から目標や手だての設定、授業計画を立て実践、評価までの一連のプロセスを示すこととする。

## 3 研究方法について

今年度からの取り組みでは、昨年度まで改善に取り組んできた「指導計画の実行(Do)」の前後にあたる「指導計画の作成(Plan)」の部分と「指導成果の評価(Check)」の部分に焦点を当て、必要な視点や考え方の整理を行う。昨年度までの取り組みに加え、指導計画の作成・評価について見直し視点や考え方を整理することによって、授業実践における指導内容や目標、支援方法などの根拠が明確になり、一人一人がより活躍できる授業づくりができるようになると考え、以下のように進めていく。

- 個別の指導計画の作成の仕方を見直す中で、それぞれのプロセス、また各プロセスをつなぐ部分に必要な視点や考え方を検討、整理していく。
- 整理された視点や考え方をもとに計画された授業実践を行い、子どもの姿から視点や考え方が適切だったかどうかを評価していく。

- 一次
  - ①個別の指導計画における実態把握、目標設定を適切に行うための共通の視点を設定する。
  - ②設定した共通の視点を基に、実態把握、個別の指導計画の目標（年間、前後期）を見直す。その過程で整理された内容や変更点を記録に残し、それを基に授業実践を行う。
- 二次
  - ③個別の指導計画の目標（年間、前後期）に対する評価の共通の視点を設定する。
  - ④設定した評価の視点を基に個別の指導計画の目標（年間、前後期）に対する評価を行い見直しを図るべき点を検討する。再度見直しを図ったことについては記録に残し、次の授業実践に活かす。
- 三次
  - ⑤各学部の取り組みを報告・検討し、個別の指導計画を作成・活用する際の学校としての共通の視点や各学部段階での視点を基に、児童生徒一人一人が目標達成に向けて力を発揮する授業づくりの仕組みを明らかにする。



#### 4 研究計画

##### 平成 28 年度（1 年目）の経過及び計画

月	研究に関する主な活動
4	研究会議：平成 28 年度の研究の方向性について検討
6	合同学部研究
7	研究会議：研究テーマ、目的、方法等の検討
8	校内研修：講師 埼玉県立大宮北特別支援学校 校長 岡村正昭氏 「個別の教育支援計画・指導計画（埼玉県プラン AB）について」 校内研修：講師 埼玉大学教育学部特別支援教育講座 准教授 名越斉子氏 「実態把握について」講義と演習
	研究会議：研究テーマ、目的についての共通理解
10	校内授業研究会
11	↓
12	研究会議：各学部の取り組みの報告 研究協議会に向けての確認
2	第 46 回特別支援教育研究協議会開催
3	「研究集録第 44 号」発行及び配付
	研究会議：今年度の研究のまとめと来年度の方向性